

事業活動報告

NO. 3

令和6年度(2024年度)

分野連携アクティブ・ラーニング対話集会の 結果報告

理系等グループ

(数学・物理学・化学・生物学・機械工学・経営工学・建築学・
電気通信学・土木工学・被服学・美術デザイン学)

分野連携アクティブ・ラーニング対話集会 オンライン開催結果

【開催日時】：令和6年12月21日(土) PM1:00~4:30

【参加者】：参加者25名(内、大学教員12名、委員会関係者13名)

【プログラム】

(1) 開催趣旨の説明

(2) 話題提供

※ LMSで時間外学習の機会は確実に増えた取組み

関西大学教育推進部教授、教育開発支援センター長 岩崎 千晶 氏

※ LMSを活用した反転学修：学修時間向上の戦略と評価

東京情報デザイン専門職大学 情報デザイン学部教授 寺田 貢 氏

※ 地域課題解決型AI教育プログラムにおける産学連携PBLの効果

久留米工業大学AI応用研究所所長、教授 小田まり子 氏

※ 生成AIの利用を前提としたレポート課題についての提案

東北学院大学情報学部教授 松本 章代 氏

(3) 意見交流

① 学修者本位の授業実現

※ 「学修者本位の授業を効果的に実現するにはどうすればいいのか」、LMS等で理解度・成長度を把握して個別に学修指導する最適化の取組みについて、課題を整理して改善策、解決策の方向性を見出す。また、反転授業の取組みについて、問題を整理し、改善策又は解決策を例示する。

② 問題発見・課題解決型(PBL)授業の理解促進と推進・普及

※ 「問題発見・課題解決型PBL授業の重要性を共有し、推進・普及していくにはどうしたらいいのか」、課題を整理し、改善策又は解決策の方向性を見出す。

③ 教員の意識啓発の促進

※ 上記①、②の授業改善を組織的に進める意識啓発の対策として、学長・学部長によるガバナンスの下で教員全員が参加するFDの仕組みを構想する。また、多くの教員に関心を誘発する方法として、FDに学生が参加する仕組みの課題と期待される効果を整理する。

④ 生成AI(ChatGPTなど)の取扱い

※ 学生が社会で生成AIを使いこなすことができるよう、大学としての課題と考えられる方策を整理する。また、生成AI使用を前提とした学修評価の課題と考えられる方策を整理する。

(4) 総括

実現可能性の観点から4テーマの改善策又は解決策を整理・提示する。その上で学びの質的転換に挑む覚悟などを共有する。

意見交流の実施結果 (意見交流で確認した課題と考えられる方策)

1. 学修者本位の授業実現

課題：LMSによる個別最適化の取組み

LMS(学修管理システム)を有効に活用することは重要である。

考えられる方策

① LMSで事前事後学修の状況をモニタリングし、個別指導する。例えば、LMSの小テスト機能を利用

用し、合格基準に到達するまで繰り返し課題に取り組ませることで、学修者の理解度に対応した学びの実現が可能になる。

- ② LMSを介して学生の考えを問う問題を提示し、学修者個々にコメントを返却することも、個別最適化への一つのアプローチとなる。
- ③ LMSに課題提出の内容を掲載し、学生相互に感想を求め、振り返りさせることも有効と思われる。
- ④ スマホを使ったLMS対応は非常に効果がある。
- ⑤ LMSで学生理解度(小テスト、レポート等)を評価し、学修達成度との関連性を分析するなど、教員の負荷を軽減するシステムの導入が必要となる。

課題：反転授業の導入、事前学修をしない学修者への対応

反転授業の導入は知識・理解の定着に非常に有効であるが、事前学修をしない学修者の対応は難しく、今後の課題である。

考えられる方策

- ① 事前学修(動画視聴、ノート作成、小テスト等)を成績評価に連動し、学びを意識づける。
- ② 授業に入る前に事前学修のポイントを復習し、小テストで理解度を確認し、個別指導する。
- ③ グループで教え合い、学び合いを行い、予習の重要性を気づかせる。
- ④ 学修者自身の知識のアウトプットや知識の相互確認などを対面授業で行うようにすれば、学修者の深い学びに繋がることが期待できる。学修者は自身の学びを相対化して把握することができるため、個別最適化の学びにも適している。
- ⑤ このような学修に取り組むためには、学修者の主体性が不可欠であるので、例えば、入学直後などにおいて学修の動機付けを行い、学修者自身の目指す人材像を意識させながら、学修意欲を醸成する取り組みが必要である。

2. 問題発見・課題解決型(PBL)授業の理解促進と推進・普及

課題：モチベーションの継続が難しく、学修意欲が続かない

PBLの効果を高めるためにはモチベーションを継続することが重要である。

考えられる方策

- ① 身近なテーマや興味・関心のあるテーマを設定して、どういう目標が獲得できるのかゴールを明確にする。例えば、地域課題など社会に役立つことを実感できるようなテーマでモチベーションを高める。
- ② PBLを履修したOB・OGを招き、社会でどのように貢献できているのか体験談の紹介やロールモデルを示す。
- ③ 他業種との連携PBLでグループに刺激を与える方法や、高大連携でPBLを実施し、高校生への指導的役割を持たせることなども有効な方法と思われる。
- ④ 知識を習得するPBL、学修意欲が低い学生も参加できるPBLなど、様々なPBLの幅を作る必要がある。その際に、学びのプロセスを評価することがとても大事になる。

課題：PBLグループで怠ける学生の不公平感を是正する手段

考えられる方策

- ① 少人数のグループ編成にする。
- ② 役割分担を明確にして、責任を持たせる。ICTツールで活動記録を残し、振り返りに活用し、相互に感想・意見を共有する。
- ③ ポートフォリオで学修成果を厳格に評価することなどにより、一定の効果は期待できる。

課題：正課外における学習の場が不足している

考えられる方策

- ① 学外の企業と大学がPBLする場合に同じ時間帯を設けるのは難しいが、企業の幹部などが出向いて学生と話す機会を設けることにより、モチベーションが上がる、新しいことに気づけることが期待できるので、できるだけそういう場を設けるような工夫をしていくことが望まれる。

3. 教員の意識啓発の促進

課題：教育力を高める教員の意識啓発促進の有効策

考えられる方策

- ① 企業、社会、学生からの評価など、各方面からの教育評価を取り入れることは教員の意識啓発につながる有効な対策である。
- ② 例えば、卒業生が勤務している企業、行政にアンケート及び大学の教育内容を送り回答いただいた上で、代表の方と話し合いを年に1回行っている。

課題：学生が参加するFDの仕組み

考えられる方策

- ① 学生自身が学んだ学修について、好事例を示す機会を大学として設けることで、教員にとって重要な気づきが得られる取組みとして、積極的に取り入れることが大事である。
- ② 学生参加型FDの導入も増えていることから、今後は学生を交えたFDの好事例を共有していくことも必要である。

4. 生成AIの取扱い

課題：生成AIを使いこなす対応

生成AIを取り入れた授業実践はまだ個人差があり、現時点では経験者が多いという状況ではないので網羅的に整理できないが、様々な試みが行われている。

考えられる方策

- ① 生成AIの長所や短所を理解させるための授業設計・授業運営では、例えば、生成AIの利用を前提としたレポート提出をLMS上で行い、生成AIに与えたプロンプト、出力結果の妥当性の確認、出力結果を検証して思ったことなどを、学びの中で確認させていく方法は、生成AIの欠点を認識させ、正しい使い方を促すことにつながることを期待できる。
- ② 生成AIにループリックや教材情報を学習させ、学生がレポートの自己評価をできる仕組みとして、自学自習用の校正ツールやティーチング・アシスタントとして活用する好事例を共有し、活用していくことが大切である。
- ③ プロンプトを入力して画像化された生成物の使用は、著作権侵害のトラブルが発生する恐れがあるので、著作権の重要性を繰り返し学ばせるとともに、肖像権などの利用者倫理に関する学修を早期に進めていく必要がある。

課題：生成AI使用を前提とした公正な学修評価

- ① 自宅でのレポート課題に対する学習評価は、生成AIを簡単に入手できるので、意味がなくなってしまう。今後は、例えば、複数の生成AIで求めた結果を比較分析させ、その結果を提出させることを義務付けるとか、学生が自分の知識をグループワークでまとめて使うなどの場を設ける必要があるという意見もあった。

総括

- ① 学修者本位については、LMSの有効性を確認した。事例等も参考に今後活用いただくことになるが、それにあたっては主体的な学習態度を早期に醸成することが重要というところが再認識されたので、我々教員はそのことを意識して教育にあたりたい。
- ② PBLを導入している大学も非常に多くなっている。できるだけ地域や社会の方々を巻き込む、異業種の方を巻き込む形でのPBLの有効性が紹介されたので、そういう方向に歩み出していただくことも大切かと思う。
- ③ 教員の意識啓発については、学生、産業界、地域社会の意見も聞きながら、進めていくことを再認識した。我々が自分で努力しなければいけないが、個人だけではなく、複数の教員で教学マネジメントの質保証が行われることに繋がることを期待したい。
- ④ 生成AIについては、昨年と比較して具体的な取組み事例が紹介され、生成AIを積極的に活用することの重要性を紹介いただいた。
- ⑤ 私情協は、今年度末で解散することになっている。今後は、学内に持ち帰り、先生方が中心となって問題提起され、教育改善に取り組んでいくことをこの場で共有させていただき、先生方のこれからの努力に期待をさせていただきたい。

文系グループ

(社会福祉学、英語教育学、法律学、社会学、教育学、統計学、情報教育、体育学、政治学、国際関係学、コミュニケーション関係学、経営学、経済学、会計学、心理学グループ) 分野連携アクティブ・ラーニング対話集会 オンライン開催結果

【開催日時】：令和6年12月23日(月) AM9:00~PM0:30

【参加者】：参加者46名(内、大学教員28名、委員会関係者18名)

【プログラム】

(1) 開催趣旨の説明

(2) 話題提供

※ 学修環境を革新する次世代LMS

青山学院大学 社会情報学部教授 宮川 裕之 氏

※ オンラインも対面もTeamsとLMSで反転授業

名古屋学院大学 経済学部長、教授 児島 完二 氏

※ 実務・研究を教育に繋げるPBL

摂南大学 経営学部准教授 塚田 義典 氏

※ アクティブラーニングにおける生成AIの活用と授業デザイン

東京大学大学院総合文化研究科・教養学部附属教養教育高度化機構 特任准教授 中澤 明子 氏

(3) 意見交流

① 学修者本位の授業実現

※ 「学修者本位の授業を効果的に実現するにはどうすればいいのか」、LMS等で理解度・成長度を把握して個別に学修指導する最適化の取組みについて、課題を整理して改善策、解決策の方向性を見出す。また、反転授業の取組みについて、問題を整理し、改善策又は解決策を例示する。

② 問題発見・課題解決型(PBL)授業の理解促進と推進・普及

※ 「問題発見・課題解決型PBL授業の重要性を共有し、推進・普及していくにはどうしたらいいのか」、課題を整理し、改善策又は解決策の方向性を見出す。

③ 教員の意識啓発の促進

※ 上記①、②の授業改善を組織的に進める意識啓発の対策として、学長・学部長によるガバナンスの下で教員全員が参加するFDの仕組みを構想する。また、多くの教員に関心を誘発する方法として、FDに学生が参加する仕組みの課題と期待される効果を整理する。

④ 生成AI(ChatGPTなど)の取扱い

※ 学生が社会で生成AIを使いこなすことができるよう、大学としての課題と考えられる方策を整理する。また、生成AI使用を前提とした学修評価の課題と考えられる方策を整理する。

(4) 総括

実現可能性の観点から4テーマの改善策又は解決策を整理・提示する。その上で学びの質的転換に挑む覚悟などを共有する。

意見交流の実施結果 (意見交流で確認した課題と考えられる方策)

1. 学修者本位の授業実現

課題：スマホ対応学生に対するLMSの接続対策

考えられる方策

- ① スマホでレポートを書かせる授業は、分量もクオリティも上がっているので、LMSの使い方を工夫する必要がある。

課題：LMSによる個別最適化の取組み

考えられる方策

- ① 学生が事前・事後学修の記録をLMSにデータとして残すように、学生にLMSの使い方を周知する。その上で、教員がモニタリング、学修達成度との関連性を分析するなどの個別指導に活用する。
- ② LMSシステムとして操作性が悪く、まだ十分に整備されていないという学生の評価がある。外部の有識者がLMSを介して授業に参加する場合、ログインできないケースなど、改良の余地は大きい。

課題：教員が授業でSNSを使用する上での対策

LINE で24時間学生から対応が求められる。また、教員のLINEアドレスを他者に知られたくないなど、新たな課題がある。

考えられる方策

- ① 24時間対応については、教員側から学生に使用時間を周知しておく。教員のLINEアドレスの取り扱いについては、授業仲間に限定することを周知する。

課題：反転授業の導入、事前学修をしない学修者への対応

考えられる方策

- ① 事前の予習、事後の復習をすればさらに成績が向上するように、教材の提示の仕方、対面授業で学びの動機づけが高まるような授業運営の工夫、事後の復習を含む評価の仕方など、インストラクションのデザインを工夫する。

2. 問題発見・課題解決型(PBL)授業の理解促進と推進・普及

課題：モチベーションの継続が難しく、学修意欲が続かない

問題発見・課題設定ができない学生へ、どのように対応すべきか、動機付けと主体性の確保という問題がある。

考えられる方策

- ① 課題の内容や方向性を示す必要があるとの意識を共有していたが、企画書を作成させる、ポスターを作製させる、課題についてスマホで動画作成をさせるなどの方法で、興味・問題意識の喚起を図ることができることを確認した。
- ② 受験知しかない学生に、問題意識を持てとか、社会の問題について考えてみようとして学びをすすめても参加が難しいので、学びに興味を持たせる工夫や、自分事の問題として捉えさせるなどの段階設定が必要になる。
- ③ 教員が何をするかを決めてしまうのではなく、学生にできる限り主体性を残して、何をするかという段階から、学生を参加させる。
- ④ 課外でPBLする場合には、何で私たちがみたいな感じになるので、単位化・必修化する必要がある。
- ⑤ PBLに集中できるよう、3日間・4日間連続して課題探求型の授業をする。地域課題を解決するPBLの場合には、地域の複数大学と協力して課題探求型の授業をすることも今後必要になってくる。

課題：正課外における学習の場が不足している

考えられる方策

- ① 授業外でのPBLは時間がかかり、学生に対して負担も大きい。現状は夏季休暇時に集中するという時間の取り方になっている。

3. 教員の意識啓発の促進

課題：教育力を高める教員の意識啓発促進の対策

考えられる方策

- ① 学生による授業評価アンケートが実施されており、ある程度教員の教育力を高めるモチベーション向上に一定の効果が期待できる。一方で、パワハラなどを恐れて教員の考えをストレートに伝えづらい問題もある。また、学生にアンケート疲れがあるので、TA、SAを通じて意見を聞く方法がある。
- ② アンケート疲れの工夫として、例えば、半期ごとにアンケートの科目を変えて、アンケートの対象項目を半分に減らす。熱意を持った科目を一つだけ回答させるなど、アンケートを絞り込んだ形で実施する。しかし、アンケート結果のフィードバックの方法、教員間の共有など、実際にどのように活用するか、踏み込めていない問題がある。なお、アンケート結果が予備校、高校に部分的に漏洩しないよう情報保護の対策を講じる必要がある。
- ③ ベストティーチャー賞などの仕組みがあると、授業改善、学生の満足度向上に繋がる。
- ④ 教員がITを駆使することは非常に大切だが、学生に主体性を提示することができないので、一定

の時間を対面によって指導することが必要である。

課題：学生が参加するFDの仕組み

考えられる方策

- ① 学生たちとの対話が重要である。学生の視点から問題点を明らかにし、どのような解決策があるかを聞くというFD手法が今後は有効となるであろう。
- ② 反対の意見は全然ないが、どのようにして参加学生を募るのか、参加を希望する学生にするのか、優秀な人達を選ぶのか、どのような方法で参加させるのか、実際に実施している事例を参考に、大学として主体的に検討する必要がある。
- ③ 北欧の大学では、学内の公式な会議で学生も対等に参画して、学内レベルの教育、質の保証に向けた活動に参加している。日本では学生が授業を評価するというところに、躊躇しているところもあるが、学生がFDに参画し、教員の教育に如何に学生の意見を反映できるかということ、真剣に考える最終段階に来た感じがする。

4. 生成AIの取扱い

課題：生成AIを使いこなす対応

考えられる方策

- ① 生成AIとはどういうものなのか、まず教員側がAIに対する経験を増やし、理解することが重要。また、職員にも使用を広げ、大学全体で教育の質向上を図る。
- ② 生成AIの指示の仕方により生成物の質が違ってくるので、学生の能力に応じたプロンプトの作り方を整理しておく。
- ③ 多くの学生がGPTに書かせてレポートを提出したけれども、深い知的な高度な学びに繋がっていない。創造的な生成AIの学びに対しては、教員がナビゲートできない段階にある。まずは、教員自身で可能性と限界を見極めることから始める必要がある。
- ④ 生成AIはいずれ教育ツールとなる時代がくる。使いこなすという課題から、人間教育の問題において、生成AIをどのように捉えるかという新しい課題を議論しておくことが必要となる。

課題：生成AI使用を前提とした公正な学修評価

- ① 期末試験などで評価も多くなっているが、論述できない学生も多い。授業回ごとに教員が練習問題を作り、生成AIを使った知見を学生に書かせることを通じて、論述の訓練を行う。なお、教員の作問も生成AIを活用する。

総括

- ① 生成AIについて討議をする中で、4つのテーマに全部関連できると思った。例えば、学修者本位のLMS活用については、学修データがものすごく溜まっているので、これを個人情報に配慮してAIに投入し、学修プロセスを分析し、学生の成長過程を整理するなどの活用が実際に大学の中でも出ている。
また、PBLの授業では、学生が困った時に、対話型のAIと相談することで、アイデアを提供する。学内業務が多忙で本日のような対話集会に参加できない場合でも、大学のDXで業務を軽減でき、学生の成長に繋げることが可能になるのではと感じた。
- ② 今後は、対話集会という機会がなくなるが、今日の学びを学内に持ち帰り、先生方の授業、学内の教育に活かしていただくことを期待させていただきたい。

栄養・医療系グループ (栄養学・薬学・医学・歯学・看護学・リハビリテーション学) 分野連携アクティブ・ラーニング対話集会 オンライン開催結果

【開催日時】：令和7年1月25日(土) PM1:00~4:30

【参加者】：参加者27名(内、大学教員15名、委員会関係者12名)

【プログラム】

(1) 開催趣旨の説明

(2) 話題提供

※ 多方向同時型デモンストレーション動画教材活用による反転授業の学習効果

佛教大学 保健医療技術学部看護学科講師 岡田 朱民 氏

※ 栄養と口腔歯科の連携を導く課題解決型学習(PBL)

札幌保健医療大学 保健医療学部栄養学科教授 川口美喜子 氏

※ グループワークと相互評価を用いた看護過程授業における学生の学び

朝日大学 保健医療学部看護学科准教授 清水八恵子 氏

※ アクティブラーニングにおける生成AIの活用と授業デザイン

東京大学 大学院総合文化研究科・教養学部附属教養教育高度化機構 特任准教授 中澤 明子 氏

(3) 意見交流

① 学修者本位の授業実現

※ 「学修者本位の授業を効果的に実現するにはどうすればいいのか」、LMS等で理解度・成長度を把握して個別に学修指導する最適化の取組みについて、課題を整理して改善策、解決策の方向性を見出す。また、反転授業の取組みについて、問題を整理し、改善策又は解決策を例示する。

② 問題発見・課題解決型(PBL)授業の理解促進と推進・普及

※ 「問題発見・課題解決型PBL授業の重要性を共有し、推進・普及していくにはどうしたらいいのか」、課題を整理し、改善策又は解決策の方向性を見出す。

③ 教員の意識啓発の促進

※ 上記①、②の授業改善を組織的に進める意識啓発の対策として、学長・学部長によるガバナンスの下で教員全員が参加するFDの仕組みを構想する。また、多くの教員に関心を誘発する方法として、FDに学生が参加する仕組みの課題と期待される効果を整理する。

④ 生成AI(ChatGPTなど)の取扱い

※ 学生が社会で生成AIを使いこなすことができるよう、大学としての課題と考えられる方策を整理する。また、生成AI使用を前提とした学修評価の課題と考えられる方策を整理する。

(4) 総括

実現可能性の観点から4テーマの改善策又は解決策を整理・提示する。その上で学びの質的転換に挑む覚悟などを共有する。

意見交流の実施結果 (意見交流で確認した課題と考えられる方策)

1. 学修者本位の授業実現

課題：LMSによる個別最適化の取組み

考えられる方策

- ① 事前学修や主体的な試み等の参加について、明確なインセンティブを示すことが必要。それに対応した評価が有用で成果の重視にも繋がる。評価としては、到達度評価、評価表なども重要だが、オスキー、ポートフォリオの活用が重要。
- ② ポートフォリオによるルーブリックでの達成度評価、前年度の振り返りの評価をすることで、自己評価を実施することが有効。なお、個別のフィードバックについては、生成AIの導入を考えていくのも一つの手法である。
- ③ 小テストのドロップアウト学生に、LMSで事前事後学修をモニタリングし、個別指導する。LMSで学生理解度(小テスト、レポート等)を評価し、学修達成度との関連性を分析する。

課題：反転授業の導入、事前学修をしない学修者への対応**考えられる方策**

- ① 学生が反転授業についていけない場合には、自己反省、リフレクションするだけにとどまるのではなく、その学生をどう救い上げるのかということが重要な課題となる。事前学習の徹底が管理主義になってしまい、学生の学び辛さになってしまわないよう、常に意識して、試みを継続する必要がある。
- ② 事前学修で提示した教材を基にして、講義で質問事項を提示させる。実習では到達度チェックを自己評価可能な評価基準や評価表を活用し、到達度確認を実施することが有効。事前学習の動画を見るだけで評価をすることは、出席点になるので適切ではない。
- ③ グループで教え合い・学び合いを行い、予習の重要性を気づかせる。但し、予習して来る学生としてこない学生との間に不公平感が生じる問題もあり、今後の課題である。
- ④ 学生間で事前学習の内容等を投票し合うことで、インセンティブを明確にし、学生が動くようにする。

2. 問題発見・課題解決型(PBL)授業の理解促進と推進・普及**課題：PBLグループで怠ける学生の不公平感を是正する手段****考えられる方策**

- ① 役割分担を明確にして、責任を持たせる。この具体的な例として、司会や書記のような役割の他に、多職種連携PBLでは、学生一人ひとりに学部・学科の代表としてグループワークに参加するという役割を与えることが有効である。
- ② 事前に役割分担を明確にするよりは、プロダクトの発表時に発表者をその場で指名することにより、学生に緊張感を持たせる。また、事前に知識をある程度揃えさせることにより、PBLに参加しやすくすることが考えられる。
- ③ 相互評価による不公平性の対策としては、ルーブリック評価のように基準を明確にして行う、個々の学生の貢献度を報告することなどにより、一定の効果は期待できる。

課題：チューター間にレベル差がある**考えられる方策**

- ① PBL終了後にチューター間で、情報交換や反省会を行う場を設けることにより、お互いのスキルアップを図り、さらに定期的にミーティングを行うことが有効である。一方、実際には、医学部中心に医師の働き方改革などでファシリテータが不足しており、PBLがあまり実施されなくなっている。
- ② 医学部では、PBLの代わりに、ファシリテータが複数のグループを担当する、上級学年生が下級生のファシリテータを務めるチームベースドラニング(TBL)を行う対策をとっているところが多い。

3. 教員の意識啓発の促進**課題：教員間で情報共有の場がとれない**

教員の意識啓発の促進には、教員間の情報共有が重要である。

考えられる方策

- ① 教学マネジメントは進んでいるものの、教員間の具体的な情報共有や連携が不足している。授業評価アンケートにおける学生からの評価データは、学生にはフィードバックされているが、教員間ではほとんど共有されていない。
- ② 一部の大学では、各担当科目から教員が参加し、教務委員会や統合委員会を設けて、情報の共有を行っている。新カリキュラムなど、新しい情報に関しては、グーグルクラスルームに動画をアップして共有しているところもある。また、FDは全員参加となっており、ほとんどの教員が出席しているが、FDを行ったことで終わってしまっている。トップダウンで具体的に、例えば教育手法、教育内容などについて検討・議論する仕組みが望まれる。

課題：学生が参加するFDの仕組み**考えられる方策**

- ① FDに学生参画を考えないと本来の質保証ができないという状況になってきている。実際には、

大学がガバナンスレベルで考えている質保証と、学生の立場に立って学生から訴えている内容というもののズレがあり、そのズレをどのように改善していくかが今後の重要な課題である。

- ② 学生が参加するFDを実施している大学はなかった。単発で意見を聞く機会を2回ほど設けた大学では、どの学生を参加させればいいのか、問題になった。学生を入れて意見を聞くのはいいが、全体の意見を拾えているかどうかわからないということから、卒業生から意見を聞くことを始めている大学もあった。

4. 生成AIの取扱い

課題：生成AIを使いこなす対応

考えられる方策

- ① 生成AIの不適切な利用を防ぐという点においては、入学時にすでに多くの医療系大学で教育指導を行っており、また、リテラシー教育の中においても生成AIに関する取組みが見受けられる。
- ② 生成AIが導き出したものについては、学生自身が批評などを議論することで、批判的思考を引き出すことができる。実際に、作った文章を生成AIに校正させたものと、人が校正したものの2者を比較させる演習が効果を発揮している。
- ③ 創造性を引き出す学びのツールとしての活用では、もっともらしく話をする一個人として考えた場合に、生成AIをグループワークの一員として迎え、対話相手として活用することで、議論を深めていく練習に非常に効果的である。

課題：生成AI使用を前提とした公正な学修評価

- ① 課題提出時に生成AIの使用を確認している対策としては、AIのレポートを明記することを徹底させる。どの程度AIが使われたのか、どこに使われたのか、どのように問い合わせたのかを明示するルールを徹底すれば、AIはパートナーとしてなりうる。
- ② 使用ツールの名前を書く、使用目的や出力した結果の活用方法などを記入させる等、自己申告によって使ったことが明示できるようにしていく必要がある。

総括

- ① 学修者本位の対策については、例えば、明確なインセンティブを示すことが大事である。到達度に対して、どのように事前学修を評価していくかという、明確な基準を設けたチェックリスト、オスキーという方法がある。しかし、インセンティブが強いと、学生にとっては学びづらさが出てくる。個別最適化については、ポートフォリオの活用が課題となるが、AIを導入して個別相談していく方法も見受けられた。事前学修しないで何もできない学生に対しては、教え合い、学び合いが自然にできるようになっていくアプローチの重要性が確認された。
- ② 問題発見、課題解決型PBL授業の理解促進と推進普及については、PBLグループで怠ける学生の不正さを是正する対策として、例えば、役割分担を明確に与える。多職種連携PBLを通じて、学生一人ひとりが学部・学科の代表であるという責任感、緊張感を持たせることで、学びに向かい合う姿勢を醸成できる。相互評価は、基準の明確化を行った上で行うことが大切。PBLの実施状況は、ファシリテータが少なくなってきたり、実施が減少している。
- ③ 教員の意識啓発の促進については、情報を共有する仕組みを設ける必要がある。各大学では委員会組織を設ける、新しい情報を動画などで理解を促進している。しかし、形だけのFDではなく、学生の成長や質の向上を図るための大学ガバナンスによる仕組み作りが重要である。
学生が参加するFDの仕組みについては、対応すべきである。学生の声をきいて質保証をすることに、しっかりと取り組んでいかなければいけない問題が明らかになった。
- ④ 生成AIを使いこなす対応として、生成AIの答えに対して、学生が見抜く力を育成することが重要である。5年後にはどうなっているかわからないというような話もあったが、AIと取り組んでいくことには間違いはない。取組みの一つの方法として、AIをグループワークの中に入れ、対話を行うことで、AIの内容について評価する方法が有効である。
- ⑤ 今後は、学内に持ち帰り、先生方が中心となって問題提起し、教育改善に取り組んでいくことをこの場で共有させていただき、先生方のこれからの努力に期待をさせていただきたい。